

カンターヤ湖ほとりで開かれる夜市は毎夜、  
パアン市民でにぎわう。パアンはカレン州の州都。

# Republic of the Union of Myanmar

EARTH GALLERY Vol.129 [ミャンマー連邦共和国]

地球ギャラリー

写真文・渋谷敦志  
フォトジャーナリスト



# 明るい街、にぎわう夜



バアン郊外のサダン洞窟内にある寺院を参拝する人々。



街でよく見かけるカエルの像。バアンの「バア」はカエルの意味。



冬瓜の収穫を手伝う子ども。



カレンの名峰スウェカビン山を背景に記念撮影。



誰でも食事できる場「サトゥディダ」で働き、功德を積む男性。



一服する市場の労働者。



バアンの市場で働く子ども。日焼け止めの効果がある「タナカ」を顔に塗る。



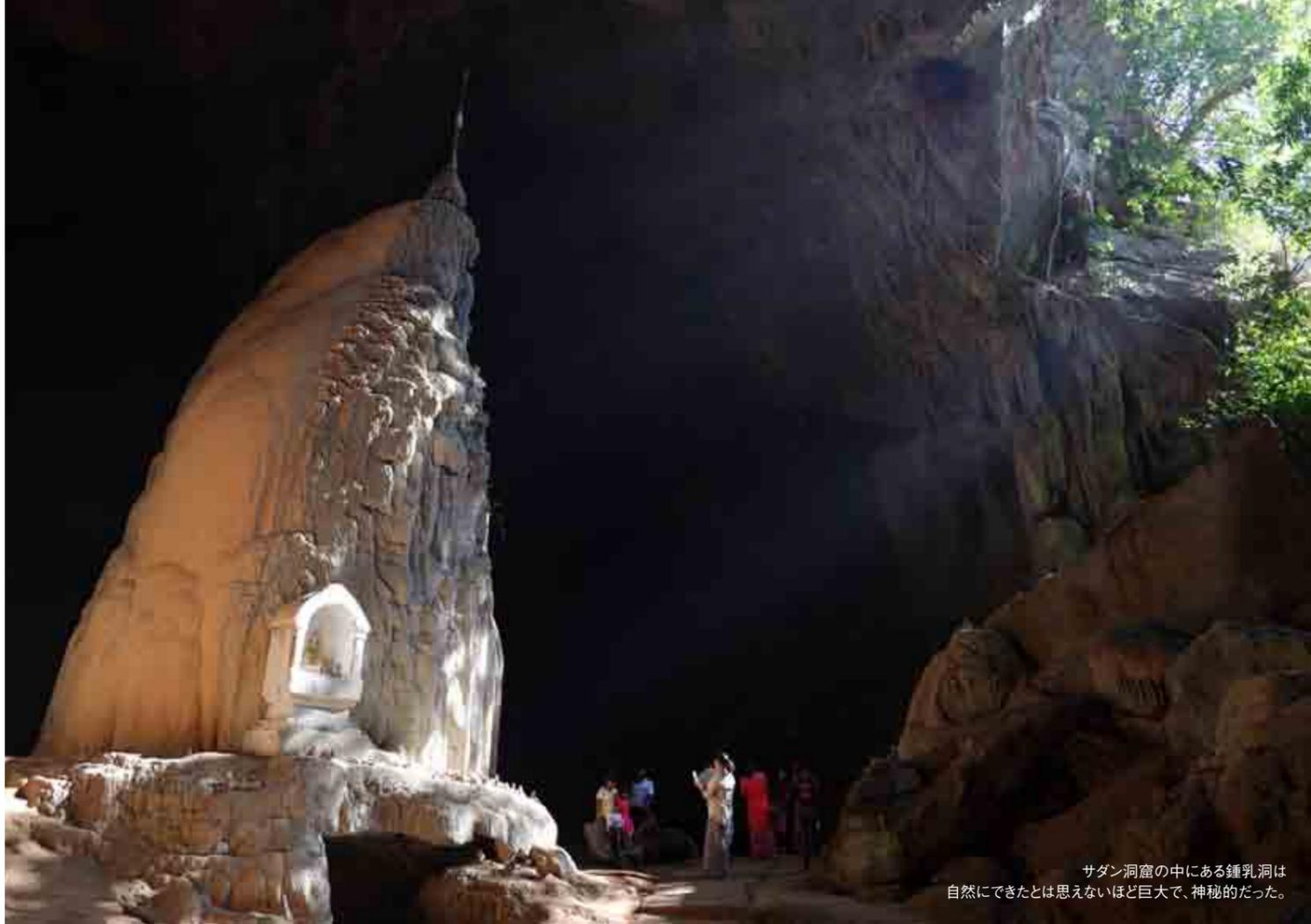
タンルウィン川の河川敷で乾季にニガウリを育てる農家。



ゴムの加工場。天然ゴム生産はカレン州の主力産業。



カレン料理。タイ料理ほど辛くなく、ビルマ料理ほど脂っこくない。



サダン洞窟の中にある鍾乳洞は自然にできたとは思えないほど巨大で、神秘的だった。

サダン洞窟を抜け、田んぼの用水路を通って帰る観光客。



乾季の2月にミャンマー東部のタイ国境と接するカレン州を訪れた。ヤンゴンから車でおよそ8時間、州都パアンに到着すると、車窓から馴染みのあるカレンの伝統服姿で歩く人が見えた。「近くて遠かったカレン人の故郷によく来たんだな」という感慨にとらわれた。その空気をもつと肌で感じようと、宿で荷を置いてすぐ、カメラ片手に街へくり出した。

市民の憩いの場だというカンターヤ湖では、若者が湖と岩山を背にスマホで記念撮影に夢中だった。湖の向こうの雄大な山こそ、カレンのシンボリックな名峰、ズウエカピン山だ。だが、ぼくが惹かれたのは湖のほとりの夜市だった。電飾が祭りのような風情を醸し出し、どこか懐かしい。

露天の夜市は、平日にもかかわらず食事を楽しむ家族連れや若者でたいへんなにぎわいだ。ミャンマー定番の「ヒン」と呼ばれるカレー屋や「モヒンガー」という麺料理屋、豚のモツを串刺しにして食べる「ドットウウ」や、巻き寿司を売る店もある。「カレンでは長いあいだ時計が止まっていたが、停戦合意のあと、針がゆっくり動き始めた。2年ほど前、屋台は4〜5軒だった。今では数え切れない。街灯がついて街は明るくなり、人の雰囲気も明るくなった」と出店しているソーザニーさんはこの数年の変化を語る。夜市を楽しむ人たちにカメラを向けていると、カレンの人びとはふだん、なにを食べているのか、どんな家に住んでい

るのか、どんな価値観を大切にしているのか、素朴な疑問が次々とわいてきた。そしてハッとした。自分がカレンの基本的なことをあまり知らずにきたことに。

長年強い関心を持ってカレンの「難民問題」を追い続けてきたが、それはタイ側の難民キャンプに限られていた。10年あまり通ったが、今でもカレンといえば、「少数民族」「紛争」「難民」を思い浮かべるばかり。もちろん、その重い現実を抜きにカレンのことは語れないのだが、カギかっことで括られたイメージではなく、カレンの人びとがなにを守ろうとしてきたかを知るために、この地域の暮らしや文化にもっと多面的に触れたいと思直した。そんな動機からカレンを巡る旅は始まった。

ミャンマーは行政的に七つの州と七つの管区に分かれる。管区には多数派ビルマ人が、州にはその州名ともなった少数民族が多く住む。1948年にイギリスから独立して以来、カレン州では支配的なビルマ人とカレン人武装勢力との紛争が続く。「世界でもっとも古い内戦」ともいわれた。2012年の停戦合意を受け、カレン州の外国人の立ち入りが認められた。長年、経済発展やインフラ整備は滞ったままだったが、それゆえに未開発の自然の恵みとつながる秘境感が残されたともいえる。

近郊の村を回るといつも、「村へようこそ。ご飯は食べましたか?」と高床式の家に招かれた。たいてい仏様が祀られる部

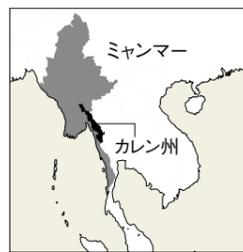
屋でお茶の輪に加わる。コータンカーという360世帯の村では、86歳になるおばあちゃんを元気づけようと大勢の村人が集まっていた。みな親戚のようなものだという。「村のバヤーにぜひ立ち寄ってほしい」といわれ、村人が共同で建てたバヤー(仏塔)に参拝する。「仏塔は私たちの一番の誇り」だという。カレン人の信仰心の篤さに多くの内側に宿る仏性らしき感覚が揺さぶられた瞬間、これまで出会ったカレン難民一人ひとりの心に、ほんの少し触れることができた気がした。

パアンでの滞在最後の日、街で尼僧の托鉢を初めて見た。先頭を歩く大人以外は全員子ども。中には10歳に満たない子も交じっていた。軒先で待っていた在家信者が米や果物などをお鉢に入れ寄進する。尼僧の列にカメラを向けると、淡々と無表情だった女の子がはにかみ混じりの柔和な笑みを返してくれた。この何百年も変わらない人の営みの原風景に心が洗われるようだった。



街中で修行する尼僧。修行を続けることができるように、市民が米などを捧げる。

写真家、フォトジャーナリスト。立命館大学産業社会学部、英国 London College of Printing 卒業。世界中の紛争や災害、貧困、人権の問題を写真と言葉で伝えていく。東京在住。近著に「みんなたいせつ」世界人権宣言の絵本(岩崎書店)、「まなざしが出会う場所へ」越境する写真家として生きる(新泉社)がある。↓抽選で1名様に最新刊をプレゼントします。詳しくは38ページをご覧ください。



\*ミャンマー政府とカレン民族同盟(KNU)とのあいだの停戦合意。その後、2015年に政府はKNUを含む八つの少数民族武装組織とのあいだで全国規模の停戦合意に署名。全武装勢力との停戦はまだ実現していない。